

Apples & People

はじめに

生産量世界一のリンゴ「ふじ」は世界中で生産されています。

タイトル

リンゴ1号

導入

このリンゴが「ふじ」と命名され、「リンゴ農林1号」として登録されたのは1962年（昭和37年）の4月21日、「ふじ」は日本の農林省によって「リンゴ農林1号」として登録されたのは先見の明があったといえるでしょう。「ふじ」は、今日では世界で最も多く商業的に生産されているリンゴで、全リンゴ生産量の三分の一を超えます。

本文

「ふじ」の物語は、その23年前、1939年（昭和14年）の青森県の藤崎町にあった園芸試験場にさかのぼります。日本人の味覚や環境に条件に適したリンゴをつくりだすプログラムの一環として、3年間の交配期間を通じて20種のリンゴから64通りの交配が行われました。

将来「ふじ」になる果樹は、明治期に米国から渡来していた「国光」（Ralls Janet）の花に「デリシャス」の花粉を手操作で授粉させて得られました。この交配によって得られた果実の種子を発芽させて、育てた苗木が1940年に植えつけられました。戦争が激しくなる、果樹の開発は不要・不急のものともみなされるようになりました。

「それにもかかわらず、わずかに残った職員の懸命の努力と場外の一部理解者の激励を受けて、交配種の苗木が守り抜かれたのは、ほとんど奇跡であったといえます」 土屋七郎

戦争が終わると、園芸試験場の職員も復員し、育種が再開されました。結実した596個体の中から、1951年（昭和26年）に至って、「国光」と「デリシャス」の交配種の注目個体の1つである「ロ-628」が初めて結実し、有望個体として選抜されました。1958年（昭和33年）になって形質が確認され、挿し木や接ぎ木のための穂木が取られ、生産農家に配布されました。

収穫高が多く、甘くて、大きく、シャキッとして果汁の多い「ふじ」は、まもなく生産者および消費者に人気のあるリンゴになりました。また、「ふじ」は貯蔵性もよく、堅さが保たれ、取り扱いも簡単なので、スーパーマーケットでも好まれています。

この新種のリンゴの候補名の選定段階では園芸試験場内で議論が沸騰したといわれていますが、

「『ふじ』という名前には、日本で生まれた世界でも第一級のリンゴが日本を代表する秀峰富士の裾野の広さにあやかかって広く普及してほしいという希望がありました」 土屋七郎

このほかにも、このリンゴが生まれ育った藤崎町から一字を貰うという意見や、当時、絶世の美人女優として知られていた山本富士子にあやかるといった意見もありました。今日、「ふじ」は、世界中で毎年 3000 万トン、およそ 1500 億個生産されている世界一のリンゴになっています。

「ふじ」の原木「ロ-628」は現在でも盛岡市に残っており、その他すべての「ふじ」の果樹はこの木を起源としています。

「ふじ」ー「リンゴ農林 1 号」は、日本の園芸家の先見の明と不屈の精神の証しといえるでしょう。

参考文献

土屋七郎「『ふじ』育成の経緯」ふじ 60 周年記念誌編集委員会「リンゴふじ 60 周年記念出版 リンゴふじの 60 年」(2000 年)より [translated 2020]